平城宮東院地区出土の建築部材

―第120次

本稿では、平城宮東院南門の東方に連なる南面大垣に開く小門SB9400Bの柱穴から出土した建築部材について、報告する（第120次調査）。当該地区については、すでに正報告書（『平城報告 XV』64頁）を刊行しているが、本部材は、概報において木製扉口地覆（本稿では、閾（しきみ）と呼ぶ）を転用した礎板として法量などを報告するに留まっていた（『年報 1980』30頁）。しかし、建築部材としても重要なもので、改めて調査した結果を報告する[1)]。

なお、本部材はすでにPEG含浸法による保存処理がなされており、痕跡が不明瞭になっていたことを付記しておく。

出土状況　SB9400は、東院地区南面大垣SA5505に開く１間門で東面大垣想定心から西へ約85mに位置する。建替えが認められ、古い方からA、Bとする。柱間寸法はSB9400Aが10尺（約3.0m）、SB9400Bは14尺（約4.1m）と大きくなり、門の東西心は約90㎝東へ移る。当該部材は、SB9400Bの東の柱抜取穴底面に礎板として、閾としての下面を上面に向けて、２点平行に据えられた状態で出土した（図342・343）。長軸方向（繊維方向）に割裂して、２点にわかれて出土したが、これが礎板として据えられた際の加工か、その後の荷重によるものかは、断定できない。礎板上面には、わずかに圧痕が認められ、柱が据えられた際のものかもしれない。SB9400Bは、遺構の重複関係および配置から考えて奈良時代後半の建物と考えられる。SB9400AからSB9400Bへの建替えを考慮すると、本部材は柱間寸法10尺のSB9400Aで用いられた可能性もある。

部材の形状と痕跡　上述の通り２点は、割裂した状態で出土したが、以下ではこれを接合した状態で考察する（図344・345・346）。よって、上面・下面は閾としてのそれを指す。長さ547㎜、幅332㎜、厚さ77㎜の板目材で、一端をノミにより円形に欠込み、もう一端をノコギリで切断する。前者は柱にあたるものと考えられ、この場合、柱径は約１尺と想定できる。上面から下面にかけて、広がりを持っており、いわゆる盗み仕事と考えられる。後者は加工痕跡が明瞭で、風食も少ない。切断後まもなく、礎板として埋設されたと考えられる。上面・下面・両側面は平滑であるが、全体に腐食によって加工痕跡は不明瞭である。上面には、円形の枘穴を１カ所、方形のほぞ穴を４カ所に穿つ。いずれもノミ（刃幅約23㎜）による。円形の枘穴は、径86㎜、深さ39㎜で扉の軸穴と考えられる。周囲に軸摺痕跡があることから、扉口上部に設ける鼠走よりも、下部に設ける閾と考える方がよい。方形の枘穴のうち、短手方向にならぶ２ヵ所は、短辺約50㎜、長辺約63㎜、深さ約45㎜、両者の外寸約268㎜で、辺付の二枚枘に対応し、長手方向にならぶ２ヵ所は、短辺約56㎜、長辺約52㎜、深さ約47㎜、両者の外寸約222㎜で、方立の二枚枘に対応する。

辺付の枘穴の柱寄りの辺は、柱の円弧と面一となるが、方立の枘穴との間には、32㎜の隙間が生じる。辺付の枘穴の扉寄りの辺から約15㎜外側までは圧痕があり、この分、枘よりも厚かったと考えられる。なおも生じる隙間に対応する圧痕は確認できないが、この分、方立が幅広であった可能性が考えられる。

類例との比較　古代建築の扉構えに閾を用いる例は、法隆寺金堂・五重塔・伝法堂で確認でき[2)]、現存遺構のなかでももっとも古い形式といえる。法隆寺金堂では、柱を地長押で固定し、その上に閾（報告書では軸受と呼ぶ）を設け、辺付、蹴放、方立を組み込む。

本部材の下面には前述の圧痕以外の痕跡はなく、法隆寺金堂のように閾より幅が広い地長押の上に据えられたと考えてよいだろう。また法隆寺金堂の方立は、蹴放の上に組み込むが、本部材は辺付と同様に、閾に直接組み込んだと考えられる。蹴放の痕跡は確認できなかったが、方立に打ち付けることで、設けていた可能性がある。

まとめ　本部材は閾として用いられた後、礎板に転用されたことがあきらかになった。シキミについては、『続日本記』宝亀３年（773）12月乙亥（29日）条に、「狂馬が弁官曹司の限（シキミ）を喫い破る」とあり、平城宮における使用が想定されており、本部材によって実例を提示できた点は重要な意味を持つ。　**（鈴木智大）**

註

1）報告にあたっては、村山聡子「柱間装置の細部仕様」『平城宮第一次大極殿院復原検討会記録』13（内部資料）、2016を参照した。

2）平山育男「扉口装置の変遷と幣軸の成立（上）奈良時代までの辺付と幣軸」『日本建築学会計画系論文集』529、249-254頁、2000。

図342　SB9400B礎板出土状況（南西から）

図345　東院地区出土の閾（上：全景、下：木口）

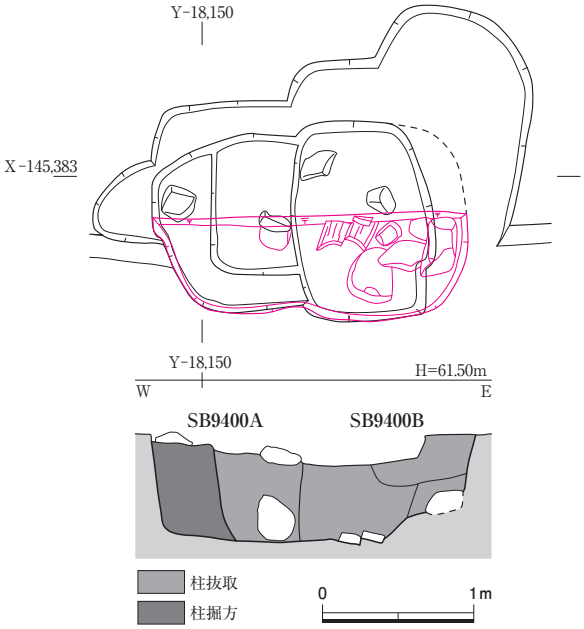

図343　SB9400東柱穴遺構図・断面図　1：50

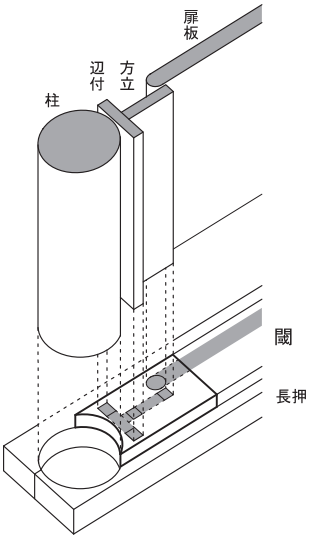

図344　扉廻復元図

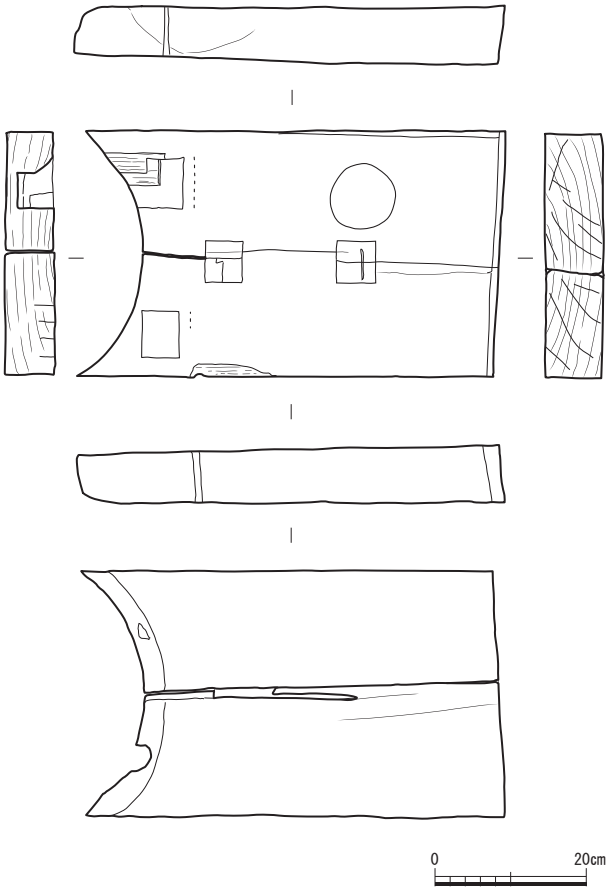

図346　東院地区出土の閾　1：10